

TOKYO AFRICA COLLECTION 2016

東京 × アフリカ
前代未聞の学生ファッションショーの裏・表





TOKYO
AFRICA
COLLECTION
Tokyo Africa Collection
TOKYO
AFRICA
COLLECTION

Message from Co-Presidents	4		
Designers & Models	5-8		
<hr/>			
RWANDA	11-12	SOUTH SUDAN	23-24
EGYPT	13-14	KENYA	25-26
GHANA	15-16	ETHIOPIA	27-28
MOROCCO	17-18	SOUTH AFRICA	29-30
TANZANIA	19-20	SOMALIA	31-32
<hr/>			
Guest Talk	35-36		
Dance Performance	37-38		
Concluding Remarks	39-40		
Cast & Crew	41		
Sponsors	43-44		



共同代表挨拶 Message from Co-Presidents

共同代表



菅生 零王
Leo Sugo

Tokyo Africa Collection 2016 はこれまでにない新しい挑戦でした。アフリカをテーマにしたファッションショーと聞いてどのようなものを思い浮かべますか。アフリカの民族服を紹介し、アフリカンな民族音楽が流れるショーでしょうか。おそらくそのようなイベントには、アフリカ好き、またはいわゆる「意識の高い」若者しか集まらないでしょう。私たちには、アフリカに関心のない若い世代が持つネガティブな、ステレオタイプ的なアフリカのイメージを一新したいという強い思いがありました。いかにそのような方々に会場に足を運んでいただき、また満足してもらおうか創意工夫を凝らしました。ランウェイを歩くのはミスコン等で知名度のある

モデルたち。個性的なデザイナーが、アフリカ各国に精通した担当者と協力し、各国の隠れた魅力を引き出しました。ストリートやジャズなどのダンスパフォーマンスが会場を盛り上げました。スタイリッシュなホームページ、音楽、映像すべてにこだわりました。こんなにもアフリカらしくない、しかしアフリカらしいイベントはこれまでになかったと自負しています。会場は立ち見も出るほどの大盛況で、驚きと称賛の声を多数いただきました。このような成功は、急ピッチかつ初の試みにも関わらず、ご協力して下さった皆さまのおかげです。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

共同代表



根津 朋子
Tomoko Nezu

この度 Tokyo Africa Collection2016 を無事に開催することができ大変嬉しく、ご協力頂きました皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。私は昨年度にアフリカ 5 カ国に渡航し、アフリカの多様な姿を見ました。一言で「アフリカ」と言っても国ごとに文化や言葉は違い、ビルが並ぶ都会があり、海と緑が綺麗で、満天の星空は心を癒してくれる。アフリカはその場所です。

の若い人たちにアフリカの素晴らしさ知ってもらえないだろうかと考えていました。そんなときに同じ思いを持つ共同代表の菅生と出会い、ファッションショーを開催する運びとなりました。

今回このショーを開催するにあたって、多くの方々のご協力がありました。皆様のお力がなければ開催することはできなかったと思います。誠に有難う御座いました。

しかし、私が日本でお会いする方は「アフリカは治安が悪い、紛争ばかり、貧困の人々が溢れる、観光地はない」等あまりいいイメージを持っていませんでした。そこで今までのような「アフリカの人たちによるアフリカの集まり」ではなく、もっと同世代



KENGO SIMIZ

TANZANIA

GHANA



中南 佑理

RWANDA



沼尻 美夢

EGYPT



頓所 葵

SOUTH
SUDAN



榎本サラ
gram所属。ショー/ショoppingモデルなどとして活躍。
CM、映画などにも出演。

角元 百花

Waseda Collection 2016モデル



EGYPT



佐々木 涼子



舛田 桃香

ミス慶應SFC2014ファイナリスト。
慶應コレクション2015モデル。
ホリプロゆかたで銀座ラブレミアムオーディション進出グランプリ。
モデルプレスTV出演

TANZANIA

石黒 滯

ミスYCU2016グランプリ(横浜市立大ミスコンテスト)



岡本 奈津美

ミス駒澤コンテスト2012グランプリ

RWANDA

横山 瑞希

2015年Miss of Circle 出場



GHANA

岸 亜由香

三木 つばき

Waseda Collection 2016モデル



佐々木 桃美

MOROCCO



伊藤 誠一朗

KENYA
SOUTH
AFRICA



鷺見 友佑

MOROCCO



中川 真琴

ETHIOPIA



稲葉 ゆめ

SOMALIA

KENYA

大栗 美南
Waseda Collection 2016 モデル



関口 沙織
Chibacawai Club 読者モデル

SOUTH SUDAN



篠原 梨奈
ミス東大2016グランプリ。
Oさま! (テレビ朝日)、ネフリーク (フジテレビ) 等にテレビ出演多数。
東大美女図鑑モデル。



鈴木 ちひろ
テレビ東京世界卓球、フジテレビ未来ロケット、フジテレビティーンガールなどに出演。
チハテレビ連続ドラマ『結婚の占星術』ではヒロイン役を演じた。



宮島 利沙
Waseda Collection 2016 モデル

ETHIOPIA



福永 胡桃
super beautyヘアショー、美容雑誌TOMOTOMOのヘアコンテストのモデル等を務めた

SOUTH AFRICA



高山 恵利佳
Waseda Collection 2016 モデル

濱野 風花
Street Style Tokyo Fashion Week、H&M Life Movie、
PFF 入選作品『甘党命 特定甘味規制法』(主演) など出演。
ヴィタルサス・インクリエイティブ・ディレクター
Marco Modulo のショーモデルを2年連続で務めた。



三友 杏奈
Waseda Collection 2014 モデル



高折 沙羅
Waseda Collection 2016 モデル

SOMALIA





Design YURI NAKAMINAMI Model SARA ENOMOTO MIZUKI YOKOYAMA

泣きわめく子供、銃声。暗がりの中、悲しい音楽と共に、デコボコとした衣装をまとったモデルが登場する。明るい音楽と共に会場は照明で照らされ、そんな悲しく、怖く、暗い雰囲気は一変する。モデルはデコボコとした衣装を破り、脱ぎ去る。その中から登場したのは鮮やかで明るくポップな衣装。笑顔でモデルはランウェイを歩く。

紛争というイメージを変えたい

「紛争というイメージを変えたい」ルワンダには激しい内戦から現在のような平和な国に短期間で変化した歴史がある。その歴史を演出と衣装双方から感じて欲しいと思い製作した。内戦という厳しい時代を乗り越え、皆が笑っている写真のイメージから、ポップなテイストで豊かな自然（写真左）とルワンダの人間性（写真右）を表現。



ルワンダは空っぽじゃない

デザイナー・中南佑理

イベントに参加する前は正直、「ルワンダ」という国を聞いたことがありませんでした。モノがなく、人もまばらで草も枯れているとか…全体的に足りていない、からっぽなイメージ。しかし、実際話をお聞きし調べていくと、自然や動物、人などとても豊かな国であると気づきました。空っぽなんかではなく充実している。従来抱いていたイメージとのギャップを感じました。それから、ルワンダの人の性格も日本人と似ていて温厚で優しいというお話も聞きました。そして、貧しい人も「お金ちょうだい！」ではなく「仕事をちょうだい！」と言っていると聞いたときは、みんな自立した生活を送るために頑張っているのか。日本人と全然変わらないのだと思うようになりました。

私を惹きつけるアフリカ

モデル・榎本サラ

私は実際にアフリカを訪れた事がなく、貧困や紛争、可哀想、助ける対象といった、受け身的に得たイメージが強かったです。ショーに参加し、アフリカ滞在経験のある多くの運営の方々のお話を聞いたり、実際に、担当したルワンダの「自然」と「人」をポップな黄色やピンクと花々で表現した衣装を着る中で、そのイメージは大きく変わりました。アフリカに対して抱くマイナスのイメージだけでなく、明るい面、素晴らしい面にも目を向けることができるようになったと思います。日本とは大きく異なる広い大地と自然、屈託のない笑顔などアフリカには私を惹きつけるものや共感させるものが多くありました。実際のアフリカに触れた訳ではないですが、これからはアフリカに思いを馳せる中で私が感じたものを大切にしたいと思いました。このショーをアフリカの人たちがどのように受けとるのでしょうか「こういう見方があるのか!」と喜んでくれると嬉しいです。

前例のない取り組みは新鮮

モデル・横山瑞季

アフリカのファッションと聞いてもあまり想像ができず、強いて言うなら布を巻いたシンプルなスタイルのようなイメージでした。ショーを通して、実際は様々な色彩に彩られたスタイルがあることに気づき、イメージが大きく変化しました。アフリカをテーマにしたファッションショーという前例のない取り組みは新鮮で、これをきっかけにアフリカの文化に興味を持ちました。



Design MIYU NUMAJIRI

Model RYOKO SASAKI MOKA KAKUMOTO

ルワンダとは一転、幻想的な音楽と暗めの照明。独特の雰囲気会場は包まれる。露出度の高い踊り子をイメージしたモデル、王妃をイメージしたモデルが優雅に、そして魅惑的にランウェイを歩く。

イスラム教と砂の国エジプト、その中にある多様で鮮やかな姿

昨今のエジプトではイスラム教の普及により肌を露出することを“良し”としない風習があるが、古代エジプトでは、イメージの踊り子（写真左）のように動きやすさを重視したものや、王妃（写真右）のように王様への求愛の表現として肌を露出することがあるそうだ。今回はエジプト宗教的制限の多さや砂砂しさといったステレオタイプと対比させ、露出度が高い服装、また指し色があるような建築物、想像以上にカラフルな町並みに着目し、ワンポイントカラーを取り入れ、自分の個性と掛け合わせながら表現。素材はエジプトを象徴するものにこだわり、古代で一般的に着られていたり、ミイラを巻くことなどに用いられた100%麻を使用した。



いかにも、な衣装ではない。

衣装それぞれに様々な意味

モデル・佐々木 裕子

アフリカと聞くとやはり飢餓に紛争、児童労働など過酷な生活をしている人々を連想します。そして、今回ショーのお話をいただいた時も、私は民族衣装や原色を使った「いかにも」といった衣装を着るのかと思っていました。しかし、実際はそうではなく、衣装それぞれに様々な意味を持たせていました。衣装を通してエジプトの海が綺麗ということや、今はイスラム教の関係で肌を露出しないことなど初めて認識できることが多々ありました。そこで私はアフリカに対して過酷・民族・宗教といったイメージ自体が固定観念のようになってしまっていたのだと気づかされました。テレビやネットから得る情報は、意識していなければなんとなく聞き流されてしまい、知ろうとしなければ知ることができません。さらにメディアに出てくるアフリカは負のイメージを中心に示してくることが多いためイメージが偏ってしまうことも理解できました。このような中でファッションショーという楽しめる媒体を通してアフリカを伝えるということにより、旧来の過酷なイメージから、アフリカはそれだけではない！と、アフリカの印象をプラスに変化させることができたのではないかと思います。

エジプト滞在の経験を元にサポート

マネージャー・町田日奈子

わたしのエジプトのイメージは、砂の国 = 黄土色、古代文明が多く現存するイスラム教国の2つが主でした。しかし実際にエジプトに行き、印象に残ったのは、紅海の青の美しさと意外な陽気さ、街並みの中に黄土色の差し色のように映える壁や窓枠のカラフルさです。若い人の持つ「エジプト=古代遺跡、砂の国、ピラミッド」のイメージではなく、私の感じた意外なエジプトを伝えたいと思いました。Tokyo Africa Collectionでエジプトのマネージャーになり、デザイナーさんとデザイン案を話したり、現地で知り合ったエジプトの方を含めて話す機会を設けました。エジプトの写真を集めてインスピレーションを得ることも重視しました。デザインとしては、黄土色の中の差し色、今はイスラム教 = 女性は肌を見せてはいけないけれど古代では露出度の高い服装も多かったという2点の意外性を表現することになりました。2点目の「意外性」に関しては、知識としては知ってはいたけれど、そのような観点で考えたことがなかったので、素直に面白いなと思いました。エジプトの意外性を感じて頂けたら幸いです。経験者、未経験者、各分野に特化したひとたち…と多様性の中でひとつのものを作り出すことが楽しくてたまに苦しくて、気づきの多い忘れられない経験になりました。



Design KENGO SHIMIZ Model TSUBASA MIKI AYUKA KISHI

「ガーナといえばチョコレート」をイメージした映像が映し出される。ガラスの破裂音と共に映像は終了し、現代的でオシャレな音楽が会場を包む。そこにオレンジと緑を基調とした鮮やかな、しかし同時に「東京的」なウエディングドレスに身を包んだモデルが登場。最後には、会場に向けてブーケパスも。

チョコレートだけじゃない。ガーナと東京の文化を融合「チョコレート」以外の印象がないと思われがちなガーナ。そんなガーナの魅力を感じられるデザインにした。テーマを「ウエディング」として、生地にはガーナの伝統的衣装によく使われる鮮やかなオレンジと緑を基調とし、現在のガーナと日本で着られているウエディングドレスのスタイルを融合させた。ガーナの伝統的文化と現代的文化、そして普段交わることのないガーナ文化と東京文化。二重の文化融合からなる新たなファッションスタイルを目指したものになっている。



生活リズムをデザインに活かしたい

デザイナー・KENGO SHIMIZ

私は現地に行ったこともなければ普段の制作ではアフリカというものを取り入れたこともありませんでした。ステレオタイプな感覚しかなかった自分がこのような経験をしたことにより、アフリカというものがこんなにも華やかでエネルギッシュな物なんだなという気づきがありました。今後は自分の制作に、自分がより調べ興味を持った、現地の生活のリズムなどから服のデザインに活かせればと思います。

表現することもできる場

デザイナーとして「ファッション」と服は切り離して考えていません。私は「ファッション」という物がそんなに好きではなく、ファッションショーなんてもってのほかでした。そんな中お誘いを受け、今回久々にファッションショーという物にかかりました。Tokyo Africa Collection を通じて、ファッションショーとは意外にワクワクするものであり、意外に表現することもできる場なんだと感じ、引き入れてくれた運営スタッフの皆さんに感謝しております。

思い込みの逆をゆくショー

モデル・岸亜由香

アフリカは、暗い感じのイメージでした。しかし、今回このショーに出させていだいてとても驚きました。こんなにも明るい衣装のイメージだとは、まして花の冠を被るなんて思ってもいませんでした。自分のアフリカに対するイメージを覆されました。ショーをきっかけに、人間には、こういった思い込み、概念、こうだろう、という決めつけがたくさんあり、しかし実際はその逆、ということがたくさんありそうだと実感しました。

アフリカ大陸は様々なカラーで溢れている

モデル・三木つばさ

アフリカに対しては砂漠、サバンナ、そして貧困のイメージしか特を持っていませんでした。しかし今回のショーを通して、アフリカ大陸は様々なカラーの国で溢れていることを知りました。アフリカに対する興味が増えました。それぞれの国にも様々な面があって、実際に行ってみたらもっと違う面を知ることができそうです。これからの社会で、アフリカはより世界に発信されていくべき存在になるのではないのでしょうか。

ガーナ人からみた Tokyo Africa Collection

エマニュエル・アピオース

ガーナは、強靱な民主主義が根付いており、大変平和な国です。今月7日に選挙も成功裏に終わりました。また、金をはじめとする鉱物にも恵まれています。日本とガーナの国民性は、実はよく似ています。双方ともとても礼儀正しく、謙虚だと思います。ガーナのコーナーのドレスは、大変素敵だと思いました。ドレスの色が、赤、金、緑のガーナの国旗を感じさせます。日本で得られるガーナ、アフリカの情報は限られています。メディアの情報が、イメージの全てになってしまいがちですね。ですから、日本の若者の固定観念を壊す Tokyo Africa Collection のコンセプトは、大変面白いと思いました。ガーナのファッションはかつていいと自負してましたし、またこのような機会があれば、是非協力してたいと思います。ガーナの多様なファッション文化も紹介する機会にもなりますね。(聞き手：津坂美貴)



Design YUSUKE WASHIMI Model NATSUMI OKAMOTO MONAMI SASAKI

デザイナー製作の4種類の異なる音楽と、光の当たり具合、光の強さなどが入念に練られた様々なパターンの照明、そして何よりも、独特の素材を用いた独特の衣装。モロッコを起点にデザイナーが作り出す世界観は、観る者を圧倒する。

昼と夜、四季の中で変化するモロッコの風景を「光と影」で表現

テーマは「昼と夜」。日本と同じように四季が存在し、一日の中で四季を体験できる日もあること、そして様々な美しいモロッコの風景などから2体とも「光と影」に焦点を当て、素材を工夫しデザイン。照明の色や当て方によって変化する光と影の様子、そしてモデルの動きに合わせてゆらゆらと揺れる影の魅力を楽しんでいただきたい。軍手を使用し制作したものは、モデルの歩きに合わせ動く、衣装上の影に注目してほしい。ヘルメットの顎紐を使用したものは、照明の光を当てた際に、衣装がより際立つようにデザイン。

マネージャーとデザイナーの共同作業

デザイナー・鷲見友佑

ショーのオファーを受けた時点で、そこまでアフリカに興味があるデザイナーはいなかったと思います。アフリカに詳しいマネージャーの方々の親切な情報提供などがあったからこそ、これに参加しなかったら知ることが出来ていないであろうアフリカの事情を知ることができました。その上で、本番では、デザイナーもアフリカに興味を持った上でショーに挑めました。僕も住んでる人の自由さや、風景の綺麗さなど今まで知ることのなかったことを知れ、アフリカに興味が多くなりました。親身に乘ってくれたマネージャー、運営スタッフの皆さんに感謝しています。

アフリカに行くこと決めた

モデル・佐々木桃美

馴染みがない遠い国々、アフリカというあまり旅行では行かない大陸。モデルはみんな自分の担当が決まった時、まず Google で調べた事でしょう。私はたまたまヨーロッパに住んでいた為、リゾート地であるモロッコの場所は分かりましたが、南スーダンは？エチオピアは？？？のような状態でした。アフリカという地に対してのステレオタイプがまだ根強いと感じます。しかしそれをこのような身近なファッションイベントというクールな形で覆そうという趣旨に感動しました。このイベントをきっかけとして、私自身ももっとアフリカに興味を持つようになりましたし、別の視点から見られるようになったと思います。たくさん来場して下さった観客の方々も同じ事を感じてくれたら良いなと思います。私も1年以内にアフリカへ行くことを決めました。更に世界を見て来たいと思います。

伝統的な要素と現代的な要素を

取り入れた様々な側面

モデル・岡本奈津実

大自然と伝統的な文化が残りながら、紛争や開発途上というイメージがアフリカに対して強くありました。しかし今回のショーを通して、デザイナーさんの豊かな発想から生まれた多くの衣装を目にし、実際に着ることで、伝統的な要素と現代的な要素を取り入れた多様な側面を知りました。運営側の皆さんのアフリカの魅力を伝えようという熱意は強く私に伝わり、華やかでかっこいいアフリカをショーで表現したいという思いでショーに臨ませていただきました。ファッションに焦点を当てたショーでしたが、これをきっかけにファッションはもちろん、もっと多くアフリカを知ろうと思うきっかけになりました。

モロッコ滞在の経験を元にサポート

マネージャー・松岡さくら

モロッコに渡航し、イスラム教の教えを厳格に守る姿やヨーロッパ文化が感じられる食事、家族や親族を大切に扱う国民性など様々な良い面を感じてきました。ヨーロッパやアラブ、インドの文化が入り混じった街の風景、真っ白な砂浜にヤシの木があるビーチ、子どもたちのキラキラした目、家族を一番に考えたり宗教を熱心に信仰する姿、どこまでも広がる緑の地平線、ステキな現地語のことわざ…など、他にもアフリカは数えきれないくらい素敵な一面を持っています。アフリカのポジティブな面を伝えたいのは勿論です。しかし、それらを観客に押し付けたくありませんでした。観客自らポジティブな印象を直接感じ取ってもらうように魅力を引き出す演出、衣装をデザイナーと共にポーティングや顔、雰囲気づくりまで細部にわたって考え込みました。



Design KENGO SHIIMIZ Model MOMOKA MASUDA MIO ISHIGURO

担当マネージャーの稲川雅也が現地で撮影した子どもたちの明るい笑顔の写真が会場に映し出される。映像と明るくポップな音楽のアレンジはデザイナーKENGO SHIMIZが。制服を買える裕福な家庭の子、買えない貧しい家庭の子をイメージしたモデルたちは、ランウェイの上で仲良く触れ合う。今日一番の明るく、楽しい雰囲気に会場は包まれる。

多様性を越えた子供たちの笑顔

多様性の国、タンザニア。キリスト教やイスラム教、裕福な家庭と貧しい家庭。しかし子供たちにとってそれらは争う理由にはならない。彼らにとってそんなことは関係なく、それらの違いを超えた笑顔がある。実際に現地で幼児教育支援に携わる運営スタッフと共同で制作した私たちが伝えられる「本物のタンザニア」を表現したい。



自己表現、明るさの象徴

としてのファッション

モデル・舛田桃香

もともと私の中に、あまりアフリカのイメージとして明るいものはありませんでした。しかし、ファッションに関しては割と派手な民族衣装のイメージはありました。それが何の意味を持つかは理解しておらず、洋服で民族を分けているのかな、と勝手なイメージを持っていました。ファッションショーに出演して、タンザニアでは貧しい子もお金持ちの子も一緒に勉強しており、子供たち間の隔たりが無いことを知りました。この事実にとっても驚き、また温かい気持ちになりました。家の違いによって学校が分けられる国も多いので、紛争がある地域でも純粋な子供の関わりがあることに感動しました。貧しい子も、ファッションを一工夫することで自分らしさや明るさを表現し、貧しさを悲観することなくのびのびと表現していることが素敵だなと思いました。自己表現、明るさの象徴としてファッションが根付いているという文化に触れ、アフリカファッションの奥深さを知る事ができました。

タンザニア教育支援団体を

設立し気が付いたこと

マネージャー・稲川雅也

今回、伝えたかったことは主に二つです。一つはアフリカ全体のマイナスイメージだけではないプラスな側面。もう一つはアフリカ各国の全く異なる多様性。その両方を同時に表現できるのが今回のコレクションだったと思います。依然日本ではアフリカについての知名度は低く、どうしても「貧困」や「紛争」というイメージが定着してしまっています。たしかにそれらは事実です。しかしそれだけじゃない。テレビには映らないアフリカの魅力がそこにはあるのです。その魅力が少しでも伝われば、と想い取り組みました。

Tokyo Africa Collection に加わったきっかけとして、まず代表が提案するコンセプトに共感したからです。「チャリティーではない、カッコいいアフリカを」まさに自分がやりたかったことがそこにはありました。私はタンザニアを舞台に活動する教育支援学生団体を運営しています。その活動の中で常々考えているのは、「真の国際協力とは何か」ということです。チャリティイベントや募金活動で寄付を募るのも一つの方法ですが、その国の魅力を伝えることが結果的には継続的な支援に繋がると感じています。募金活動などではどうしても「貧困」「孤児」などのワードが人をひきつけます。それは仕方ないことですが、人々の頭の中には被支援国でかわいそうな国として印象付けられてしまいます。その全く逆のプロセスでアフリカを盛り上げようとするショーコンセプトに感銘を受け参加しました。





Design AOI TONSHO Model CHIHIRO SUZUKI RINA SHINOHARA

夢に向かって頑張る女の子をイメージした、心が躍りだすような音楽と明るい照明。牛をイメージした衣装で登場するモデルに、どこからともなくバスケットボールがパスされる。それを受け取ると、モデルはバスケットをイメージした衣装に早変わり。颯爽とランウェイを歩く。次に可愛いビーズをあしらった衣装のモデルが優雅に登場し、会場を魅了する。

「ビーズでお洒落な女の子」と「牛とバスケット」から南スーダン伝える作品を通して南スーダンの「意外性」を捉えた。紛争のイメージが根強い南スーダンだが、女の子はお洒落に夢中。中でもビーズは民族によって色や付け方が異なりとてもユニーク。そんなビーズを基調とした服に南スーダンの「お洒落にこだわりたい女の子の想い」を感じて欲しい。もう一体のイメージは、「牛とバスケット」。南スーダンは今年初めてオリンピックに出場。国民はスポーツが大好きで、なかでもバスケットボールは NBA の選手を多数輩出するなど注目を集めている。他方、緑に恵まれた南スーダンでは牛が家族のような存在。そんな牛とバスケットの要素を取り入れた服と演出になっている。

行ってみなければ分からないことを

切り取って描いた一枚の絵

モデル・篠原梨菜

私はアフリカに行ったことがなく、アフリカの国々に対して地理などで学んだ統計の数字や、政治史などの偏ったイメージしか持っていませんでした。南スーダンについても紛争地帯であったり、外務省から国外退避の指示が出ていることしか知りませんでした。しかし、そこが人々が積み上げてきた文化とともに暮らしている1つの社会である以上、私が訪ねたことのある場所と同じように、そこに暮らす人ならば当たり前知っていることでも行ってみなければ分からない事が沢山あるでしょう。Tokyo Africa Collection 2016 で出会ったファッションは、いわばそれらを切り取って描いた一枚の絵でした。ショーの後、「アフリカ」という言葉を耳にして呼び起こされた印象は、わくわくするような土地と豊かな人々になっていました。

ファッションショーに参加して目にした数々のファッションはとっても新鮮で、固定観念を打破してアフリカの新たなイメージを伝えるという目的には、人に密着していかつ視覚的な芸術表現であるファッションショーがとてつとびったりなのだと思いました。どのスタイルも、アフリカの民族衣装という感じはなく、国々のある一面を切り取っていました。これまでは、海外といってもアジア方面にばかり目が向いていましたが、これを機に、アフリカのことをもっと知っていけたらと思いました。

着ていて幸せになれる服

モデル・鈴木ちひろ

いままではアフリカの印象として、紛争などで危険なイメージやあまりきらびやかなイメージは私の中でありませんでした。しかしショーを通じて、私が今まで抱いて印象とはがらりと変わりました。ショーでの衣装も、色が鮮やかで華やかな印象。着ていて happy になれるようなものばかりでした。すごく気分が明るくなり、幸せな気持ちでいっぱいになりました。ショーに出ることが出来て、そんな幸せな空気を沢山味わえました。

リサーチ：負の印象が極めて強い

南スーダンの魅力を掘り起こす

マネージャー・菅生零王

今回のショーで取り上げた 10 か国の担当チームは、主にマネージャーとデザイナーで構成されていました。マネージャーの最も重要な仕事のひとつに担当国のリサーチがあります。過半数の国では、その国に滞在した経験のある運営スタッフがマネージャーとしてつき、それぞれの現地での経験や観たこと聞いたこと、撮影した動画や写真などまさに生の情報をデザイナーに届けました。

しかし私の担当した南スーダンは現状は内戦状態にあり、政府関係者ですら国外退避を命じられています。負の印象が極めて強いからこそ、それを逆転させたい、良い面も観てほしいと思い南スーダンをショーで取り上げることにしました。しかしこの国を訪れたことのある一般人は限りなくゼロに近く、またインターネットや書籍なども、負の側面に焦点を当てた情報で溢れていました。そこで、国外退避中の JICA 南スーダン事務所の方々や、国際 NGO ジャパンプラットフォームの南スーダン担当の方などを訪れ、聞き込み調査を行いました。どこの馬の骨ともわからない一学生の取材に、真摯に、とても親切に対応してくださいました。その様子は、Tokyo Africa Collection のウェブサイトでもご覧いただけます。そこで初めて、南スーダンの知られざるポジティブな一面、身近な一面などを知る事ができました。デザインと演出にはそれらをダイレクトに落とし込んでいます。ショーをきっかけにより多くの方が南スーダンに対して、「助ける対象」「危険な場所」以外の何かを感じて頂けたらと思います。



Design SEICHIRO ITO Model SAORI SEKIGUCHI MINAMI OGURI

デザイナー制作の音楽、衣装、照明すべてが作品のコンセプトを伝えている。照明の当て方を工夫し、モデルはランウェイ奥から中央へ、中央からトップへと交互に瞬間移動するような演出に。ケニアの移ろいと変化の中で入り混じる人々をデザイナーの解釈で表現した。モデルが手に持つオブジェにも注目。

移ろいが生み出す強さ

東アフリカのGDPの40%以上を担うケニアは先進的な空港や地熱発電が今でも経済を飛躍的に加速させ、めまぐるしい発展を遂げている。その背景には、共存する「多数の民族」や「自然」の“度重なる変化”があった。そんな中で人々は生きる「強さ」を身につけた。今回はその「強さ」にフォーカスし、衣装は素材そのものの特徴を生かし、それらが生み出すコントラストでケニアの内なる「強さ」を描いた。



衣装そのものの強さ

デザイナー・伊藤誠一郎

常にものごとにはポジティブな面とネガティブな面が備わっています。今回はポジティブな面に光をあてつつ、ネガティブとも捉えかねうる面も取り入れることができ、そこが衣装そのものの強さに繋がったのだと思います。アフリカの民族性は昔からファッションブルかつ、正統性があり、表面上ではない魂のようなものを感じることができます。なので、そこを独自の解釈で再現しました。ショーにおいて一番印象的だったのは、様々な年齢層のお客様が見に来てくれたことです。ファッションショーとなると観に行ったことの無い人の方が多いと思いますが、今回のショーのコンセプトがその垣根を越えて結びつけたのだと感じました。

ケニアに行きたくなった

モデル・関口沙織

元々ファッションは好きな方でしたがショーに参加する前は「アフリカ - ファッション」という繋がりやイメージは全く持っていませんでした。しかし、スタッフやデザイナーの皆さんからアフリカ（特に担当だったケニア）について急発展を遂げていることやその強さがあることなどを聞き、人生で行きたい国リストに入りました。私が経験したアフリカのイメージの変化を今後は周りに伝えていきたいです。

ケニアで私が思ったこと

マネージャー・根津朋子

私が初めて訪れた発展途上国がケニアでした。途上国の貧困をなにも知らなかった私は自分の目で見てみたいと思い、貧困のイメージが強いアフリカのケニアを選びました。ある日、道を歩いていると一人の女性が近づいてきて、日本人の私を見るなり私を神様に頼み込むように、「Give me money」と言ってきたのです。肌の色や見た目でお金持ちで援助をしてくれる人と判断され、一人の人間として扱われなかったことに悲しさを覚えました。そして同時に「自分の力でどうにかしてよ！」と他人任せのケニア人に怒りが湧いてきました。しかし、そういうケニア人がいる中で、ケニアの貧困の状況を変えようと立ち上がるケニア人たちもいました。彼らはボランティアを受け入れる環境をつくり、貧困層の家庭を頻りに訪問し、様々な取り組みをしていました。その姿を見て私もなにかできないだろうかと模索するようになりました。私1人では貧困などのアフリカの問題は解決できないと思い、もっと多くの日本人にアフリカに興味を持ってもらうことから始め、アフリカの様々な問題解決に力を貸してもらいたいという思いが、このファッションショーの運営に関わる中で私の根幹にはありました。



Design MAKOTO NAKAGAWA Model KURUMI FUKUNAGA RISA MIYAJIMA

穏やかな音楽と優雅にゆったりとランウェイを歩くモデルたち。観客が、衣装で表現したコンセプトをじっくり考えられる、スタイリッシュで洗練された完成度の高い王道の演出だ。

「コーヒーセレモニー」と「火山でランニング」

エチオピアの独特な文化、性格や内面性、そして特徴的な自然を軸としてデザインした。コーヒーで有名なエチオピアだが、そこで行われているコーヒーセレモニーの習慣を知る人は少ない。「セレモニー」という事で上品に、更に几帳面と言われているエチオピアの人たちをプリーツを通して表現。世界でも有数の活火山のあるエチオピア。また、高山帯にあるために、優秀なマラソン選手も多い。2 体目は、そんな火山とマラソンをかけ、ただれた山肌イメージのフリンジと、流行りのスポーツを mix させた。見る人が受け取りやすい形にするため、色やディテールに気を使い、分かりやすい、発想やすいよう心がけた。



ファッションショーは難しい

デザイナー・中川真琴

若者にアフリカを意識してもらおう手段としてファッションショーを選択したことは、分かりやすく馴染みやすいと思いました。しかし、ファッションショーで何か意図を伝えるというのは、ものすごく難しいことです。今回のショーで、このデザイナーは何を伝えたいのかと考えながら見て下さった方がいたでしょうか。ファッションショーで意思疎通するのは、難しい。改めて感じました。ファッションショーとは、服を通して製作者の意思を伝えるひとつのツールだと考えています。関わっているたくさんの人の想いや考えを具現化し、観ている人に伝えられるようにしたいです。

カラフルでポジティブ

モデル・宮島利沙

ショーの前はアフリカと聞かれてははっきりとしたイメージが湧くのは、エジプトなど数国でした。特に自分が担当させて頂いたエチオピアの事は全く知らず、どんな国なのか、どんな衣装を着るのか想像が付きませんでした。しかし、ショーが終わると、それぞれの国のモデルが着た衣装などを見たりして、とてもカラフルでポジティブな印象を受けました。アフリカというスポットライトの当たりにくいような国々をこの様なファッションショーという形で発信する事ができて、見て下さった方に良い印象を与えられたのかなと思います。

正直開催は難しいと思った

ショーが成功に終わるまで

マネージャー・伊藤知会

エチオピアのマネージャーとして、エチオピア独特の少し落ち着いたイメージを、そしてエチオピアならではの観光地を伝えたいと思いました。几帳面で真面目な正確をしているエチオピアの人々を表すよう、黒のロングスカートのスタイルとしました。更に、派手でカラフルな洋服イメージのアフリカではなく、エチオピア独特の白に刺繍の入った民族衣装から新たな一面を伝えるよう、同じく白い衣装で落ち着いたスタイルを表現しました。白に首元を赤くすることで、エチオピアにある観光名所の一つ、エルタ・アレ活火山を表現しました。アフリカの洋服は決して、カラフルで派手な柄な物だけではないということ。そして、アフリカのイメージとして無い火山を取り入れ、今までにないアフリカのイメージを与えることを心がけました。

アフリカのことをあまり知らないデザイナーさんが、自由に表現することにより、より多面的なアフリカを表現できたと思います。これらの表現方法により、私自身も新たなイメージを持つ事ができました。更に、一ヶ月という短い時間でここまでのショーへとした、一人一人の努力はすごいものだと思っています。はじめてミーティングに参加した際、正直ショーなんてできないと思っていました。しかし、一人一人が与えられた仕事をこなし、情報を共有し、助け合いながら集中力を切らすことなく本番を終えたとき、ショーは成功に終わり、大きな達成感を得ていました。このショーに関わった全ての人と、ショーを企画してくれた共同代表の二人に感謝しています。



SOUTH AFRICA

Design SEICHIRO ITO Model FUKA HAMANO ERIKA TAKAYAMA

魅惑的な音楽とともに、モデルが間隔を空けて登場。中央で背中合わせで重なり合い、360度順々に方向を変え、まわってゆく。やや暗めの照明の中で表現される「南アフリカ」に観る者は息を呑む。

「都市と労働のエネルギー」経済の発展とそれを支える人々

南アフリカはアフリカの中でも経済発展が一番進んだ国。またピンクや、カラフルな建物が多く、言語、多様性に富んだ国。そんなエネルギッシュな部分とそれを支える労働と人々のパワーをオリジナルの素材で表現した。1 体目は、5 色の糸をつかったオリジナルのテキスタイルで独自の発展と遂げた音楽や言語の多様性を描いた。2 体目の注目ポイントはモデルが手に持つオブジェ。ケープタウンのピンクでカラフルな街並みとそれを支える労働者を独自の解釈で表現した。グルーヴ感、全体の繋がりがや流れを意識して製作。



表情からも南アフリカの

イメージが伝わるように

モデル・高山恵利佳

南アフリカは貧困層が大半を占めている国というイメージでした。今回の衣装は一方は貧困層を、もう片方は富裕層を表しているように南アフリカにも二つの層が存在することを知りました。そしてピンクのオブジェが意味することは、ピンクのオブジェ自体が南アフリカの代表的なビルを表しており、そのビルの下に貧困層が流した汗・涙・血が流れています。貧困層が存在することによって富裕層が存在することができること理解し、私の中で色々な意味でイメージが変わりました。多くの人に観ていただいて、とても嬉しかったですし、楽しかったです。衣装からだけでなく表情からも南アフリカのイメージが伝わるように努めました。

アフリカにもこんなにカワイイが

マネージャー・三瓶聖奈

ショーに携わる前は負のイメージが強く「黒人、土、紛争、病気」というように魅力を感じられる部分がほとんどない状態でした。しかし、ショーを作り上げる過程で本気でアフリカの負に向き合い、一緒に歩み続けてきた仲間話を聞き、調べていくうちにアフリカも「私たちと変わらない」ことに気づきました。今回の南アフリカも、同じようにピンクでかわいいホテルがあったり、今時の女の子が好きそうなカラフルポップなお家が並んでいたり。異文化が錯綜した地でもあるのでグルメもとことん豊富。「これって、普通に観光地になるんじゃない？」という期待さえ湧いてきました。そんな一面を知ることができたこと、そしてアフリカに真剣に向き合ってきた仲間と触れ合い新しいアフリカの部分を知れたこと、本当に良かったと思います。

『アフリカ』という負の4文字を乗り越える

それが広報の一員としてもショーに携わった私の今回のテーマでした。現実問題、ターゲットであるアフリカに関心のないミーハーな大学生にいきなり「アフリカ」という4文字を押し付けても振り向いてもらえません。それは自分自身でも強く感じていました。だからその分思いっきり振り切った意外性を伝えることに奮闘しました。宣伝記事では「アフリカにもこんなにカワイイが詰まってるんだよ!」ということ、言葉やアフリカとは思えない写真を工夫してどんどん伝えました。そしてショー本番を見て、そこからステレオタイプのアフリカを簡単には想像できなかった自分がいて、それだけでもコンセプトに近づけたものをみんなで作れたのかなと思いました。そんなショーが作れたのも1ヶ月と1週間という期間に妥協せず、絶対やり遂げるんだっていうマインドを持った仲間が常にいてくれたからだと思います。やればできるという基礎的なことだけどなかかなかできないことを学びました。



Design YUME INABA Model ANNA MITOMO SARA TAKAORI

ショーのトリはアフリカの中でも特段にネガティブなイメージが強いソマリア。明るい音楽と、鮮やかな青を基調とした衣装がそんなイメージを一瞬で吹き飛ばす。モデルの動きに合わせて、風になびくような衣装に、ソマリアの美しい海や空を感じる。

観光では中々行けないソマリアに、行けたような感覚になる服「比類なき人類の悲劇」とも形容され、海賊、紛争、不安定な政治、飢餓といったイメージが格段に強いソマリア。しかしそんな暗いイメージとは裏腹に、ソマリアにはキラキラと光る綺麗な水色の海、青く澄みどこまでも続く広い空がある。今回は、現状では実際に行くことの難しいソマリアへ旅し、まるで美しいソマリアの海や空が目に見えるかのような感覚を呼び起こす衣装を製作した。1 体目は、TICAD VI の開催に合わせ、日本とのより深いつながりを願って、和服風にアレンジ。衣装から大地と雲の境目、ビーチでの風を感じてほしい。



考えたことや膨らませた

イメージの完成形としての服

デザイナー・稲葉ゆめ
 ショーを経験する前までは、治安が良くない、紛争などといったイメージがあったため、アフリカを訪れるのは難しいとさえ思っていました。デザイナーとして、アフリカはイメージだけではデザインしにくいものがありました。しかし、情報を集めることによって、想像を超える美しい景色、アフリカに暮らす人々特有の人柄を知ることができ、アフリカのいいところを思う存分に詰め込みたいという気持ちになりました。たくさんの方の力が合わさってできたこの素晴らしい場所で、考えたことや膨らませたイメージの完成形を服として標榜できたことを光栄に思います。デザイナーとして自分がイメージしたものをお客様に直接読み取ってもらうのではなく、服を見た人が、アフリカのいいイメージを知るためのきっかけになってほしいと思います。また、これを機にソマリアをもっと知っていただき、後から服を見た時に「なるほど」と思っていただければ幸いです。

様々な分野の将来を担う

学生の活躍を1日に凝縮

マネージャー・田中葵
 Tokyo Africa Collection では、大学に通い、NGO で国際協力に携わる私の学生生活だけでは、関わることのできない人たちに出会うことができました。同じ学生として、ファッション、開発、あるいはカメラなど様々な分野の将来を担おうとしている方々の活躍を1日に凝縮し、共に仕事することで身近で見ることができました。とても刺激を受けました。今回携わった人みんなに共通して言えることは、口だけでなく有言実行する行動力が備わっていること。自ら先頭に立つ人がいれば、みんなに的確に仕事を分け与える人など、学生だけで作り上げたとは思えないショーの出来栄から伺えるように、有言実行する力がある方々と仕事できたことに何より学ぶことが多かったです。当日は、想像以上に観客が集まってくださり、気軽に渋谷に来たついでに寄って下さった方もいらっしゃいました。もともとショーのコンセプトとして、堅くなく気軽にアフリカを感じてもらえるようなショーにしたいという想いがあったので、このファッションショーを通じてアフリカの魅力を伝えられ、最大目的を果たすことができたと感じています。





司会 藤野 滢花

an・an 読者モデル。現在 JJ の連載に掲載中。NHK 杯全国高校放送コンテスト全国大会に二年連続出場し、演奏会の司会やイベント MC・ウグイス嬢など、その活動は多岐に渡る。

渡部 雪絵

株式会社 DressPress 代表。
子どもに投資 & 日本製のエシカルなファッションブランド AYUWA を手がける。



ここまで広がりのあるショーは初めて

これまでいくつかのブランドさんのショーに行かせて頂いたことがありました。しかし、ここまで広がりのあるショーは初めてだと思っています。このショーの中で 10 か国のものが観られるというお得さもあつたと思いますが、それぞれに対するデザイナーさんの思いだとかをひとつひとつで説明頂けて、その奥に何があるのかなというのを感じられました。

香りを感じた

南アフリカには香りを感じました。モデルさんが香ったということではなく、真っ赤な衣装が登場してきたときに、これって本当になんなのだろう、何の赤なのかなということ、行った事がない国なので想像しながら、しかし何かを感じられたような気がしました。

演出に驚いた

演出もどの国も凝っていて、モロッコではバツと照明が消えた瞬間光るのが出てきたりしてとても驚きました。ただ洋服をみるだけだったらそのショップに行けば、飾ってあるものもありますし、試着をすれば自分自身も楽しめるという物もあるとは思いますが、ショーというものを考えたときに、非常に考えられたものが多かったと感じます。今回のショーや服の完成度を観て、学生デザイナーの方々の実力が何十年もやっている方に比べて劣っているなどは全く思いませんでした。今回が第 1 回という事で、第 2 回、第 3 回と今後ショーがどのように進化していくのか非常に楽しみです。



佐藤 慧

フォトジャーナリスト、ライター。
アフリカや中東、東ティモールなどを中心に取材。



多様性の大陸

アフリカをひとつの大陸としてイメージしている方が多いかと思います。しかし、国ごとに本当に異なる色彩を持っていますし、一つの国の中でもいろいろな民族が入り混じっていて多様性の豊かな大陸なのかなと感じています。

今回のショーではエジプトがまず印象に残りました。アフリカの中でもサハラ砂漠を隔て文化が違、自分は何度もアフリカに行ってアフリカを観てきた気がしていたのに、エジプトに根付いてきた文化というのが僕にとって凄く新しく、色彩と、テキスタイルと、まだまだ知らない世界があるというのをたくさん見させていただきました。

モロッコのアバンギャルドさ

モロッコのアバンギャルドさもすごくびっくりしました。僕はモロッコには行った事がなくただイメージはありましたが、ヘルメットの巾着と軍手など、僕だったら 200 年かかってこのようなアイデアはわからないと思います。行った事のない国をインスピレーションの源としてああいう新しいものがつくれるっていうのは、人間が未知の文化に触れる新しい可能性を提示してくれているような気がしました。モロッコに対する興味も、そのデザインからかえって引き寄せられる気がしました。

南アフリカでも受け入れられそうなデザイン

これが一番の国っぽいな、と思ったのは南アフリカです。アフリカに行かれたことのない人はどうしても後進発展途上国とか貧困などのイメージがとても強いかもしれませんが、南アフリカはすごくモダンな国なんです。スマートフォンの普及率をみれば南アフリカは世界で No.1 で、新宿にも負けないような高層ビル群もあります。また歴史の中ではアパルトヘイトであったり、いろいろな人種間の紛争を経てきていて、しかしそんな困難を乗り越えた新しいモダンズムを持った国です。今回デザイナーの方は血の赤をいうものを表現しつつも、それをモダンに解釈して、これほど多様性がある国なんだ、ということを出してくれていました。南アフリカの衣装は、本当に南アフリカでファッションショーをやっても受け入れられそうです。



あらゆるジャンルの
ダンスパフォーマンスが会場を盛り上げた

Be-yan ¹
2016年ムーンウォーク世界大会準優勝
早稲田マイケル・ジャクソン研究会代表 等



Shuji ²
Michael Firestone 日本公演 2016 バックダンサー
早稲田大学シアターダンス研究会創設・代表 等

uzuna & しびしび ³
plusone 1on1 freestylebattle 優勝 onechance!!
学生サイド優勝 WDC2016Lock Final best8 等



グローバルフェスタから

Tokyo Africa Collection 2017 へ

(福岡理緒菜)

＊2016年10月1日にお台場で行われたグローバルフェスタ2016(外務省主催)。Tokyo Africa Collection 2016はメインゲストとしてJICA/国際開発ジャーナル社共催企画「ファッション&トークショー 国際協力いろんなカタチ」に出演しました。それを踏まえ、Tokyo Africa Collection 2017の代表就任予定の福岡理緒菜さんに思いを語ってもらいました。

Tokyo Africa Collectionは、私の「アフリカ観」をガラリと変えました。この企画に関わる前は、アフリカのネガティブな面しか知らなかったため、私の「アフリカ観」には常に、汚くて悲しいイメージがつきものでした。しかし、Tokyo Africa Collection に関わって以来、アフリカの持つコンテンツの強さや可能性に気が付き、もともと持っていたイメージが激変しました。「世間に知られていないアフリカの魅力をどう発信するか」を考える楽しみは非常に大きかったです。Tokyo Africa Collection 最大の目的は「アフリカに無関心な人々を巻き込むこと」。というのも、従来の類似団体やイベントは、ダサい上に対マスのリーチ力に欠けると思っています。魅力が無くて、少数の人にしかリーチしないから、結果「意識高い系」の内輪で終わってしまっている。そこで、Tokyo Africa Collection では、アフリカに興味のないマス(特に、派手なイベントが好きなミニーハー層)を惹きつけるために話題性の高いモデルを起用しました。“単純にショーを楽しむ”という経験を通して、「アフリカ」、ひいては国際情勢に対して何か気づきを得ることができるようなショーの構成を意識しました。実際、前回のショーを見た方々からは「視覚的に面白いだけでなく、今まで知らなかったアフリカの一面を知ることができて有意義なイベントだった」「アフリカなんて興味なかったけど、ショーの後Googleで少し調べた」と好評を受け、目的の達成を実感しました。それだけではなく、外務省主催・国内最大の国際協力イベントであるグローバルフェスタに招待していただき、なんとメインステージを任せていただきました。グローバルフェスタでは「学生による新しい形の国際協力」との紹介を受けたのですが、Tokyo Africa Collection の革新性を認めてもらえたような気がして、非常に嬉しかったです。ありがたいことに、予想以上に多くの方々がTACに興味を持って下さり、今後の活躍に期待を寄せてくださっています。2代目の代表として、ポテンシャル溢れるTokyo Africa Collection をマネジメントすることの責任の重さを受け止めつつ、誰よりもワクワクしながら「Tokyo Africa Collection2017」に向かって走って行きたいと思います。更に大きな影響力で、更にクールなアフリカを。

エチオピア奮闘記

道端ファッションショー開催に向けて

(伊藤知会)

＊Tokyo Africa Collection の運営スタッフはショーの後も様々な分野で各々奮闘しています。エチオピアのマネージャーを務めた伊藤知恵さんは現在エチオピアでのファッションショーの実現に向けて動いています。

ファッションは人間だけが楽しむことができる特別な感性であり、言語の壁を乗り越えさまざまな情報を受発信できるものでもともと私は思っています。私はファッションに無限の可能性を感じるのです。

エチオピアの人たちと関わる仕事をするのが、幼い頃からの夢でした。小学4年生の時に80年代に起きたエチオピア大飢饉の現状を知ったことがきっかけで、将来はエチオピアで何かをしたい強く思っていました。そして2016年10月、ついにエチオピアに来る事ができました。エチオピアの最高品質レザーと、80以上の民族から成り立つこの国独自の伝統衣装から、将来ファッションを通してエチオピアを世界に広めたいと思ったのです。エチオピアの服飾学校を見学しました。レザーの鞣し工場や製造工場へ訪れました。エチオピアで活躍する何人ものデザイナーたちに会いました。そして幾つかのファッションショーを見に行きました。

しかし、ここに関わる人たちはほんの一部の人たちであり、エチオピアのレザーが最高品質のものであることを知っているエチオピア人はほとんどいません。彼らのデザインがどれほどユニークなものかを知っている人たちもほとんどいません。私は世界中にこの素晴らしいファッションを知ってもらいたいと思うと同時に、エチオピアの人たちにもその価値やユニークさを知ってもらいたいと感じました。そこで私のたどり着いた結論は、どんな人でも気軽に、無料で見る事のできるファッションショーの開催です。エチオピアの首都アディスアベバの中心街、Piazzaにあるショッピングモールのエントランスを利用してファッションショーを開催します。そして同時にファッションショーの様子を動画で世界へ配信します。アディスアベバはどのような街並であり、どのような人たちがいるのか、世界中の人たちに届けられればと思います。開催まであと1ヶ月を切りました。課題は山積みです。無事ショーが開催できるよう奮闘する日々は続きます。

一ヶ月の無謀な挑戦

届けたい相手はイマドキの若い女性

(菅生零王・共同代表/演出監督/広報統括)

ほぼ1か月で100名以上の人を巻き込み、企画から実施まで至ったTokyo Africa Collection 2016。本当のアフリカを伝えたい、という使命感は運営スタッフそれぞれにあったと思います。それでも1か月、死に物狂いで努力したのは「絶対に面白そうだから」。イマドキの東京と意外性に満ち溢れたアフリカを、ファッション、エンターテイメントを通じて、繋げる。2016年7月末、そんなコンセプトを根拠のない自信と共に語り、人一倍わくわくしている自分がありました。そんなTokyo Africa Collectionは挑戦と困難の連続でした。ファッションショーをやったことがないのにこだわりだけは人一倍強いだから、当然といえば当然です。ゼロからの挑戦でした。

エンターテインメント重視

これは本当にアフリカをテーマにしたイベントなのか。そう思ってしまうような、ステレオタイプの逆をいくショーを目指しました。何か伝えたい、と思う人にありがちなはその思いが先行し、「押しつけ」になってしまいうことです。私は大事なのは、いかにお客様に楽しんでもらうかだと思っています。楽しんでもらったうえで、伝えたい思いを感じてもらえれば良い。このエンターテインメント重視の姿勢は、ショーの企画を通して、演出監督として貫き通しました。

ブレイクダンスにミスコンモデル

会場を盛り上げるためのダンスパフォーマンスも取り入れました。アフリカの民族舞踊ではありません。民族舞踊がダメなのではなく、イメージの逆を、若者が盛り上がるという点を重視しました。アフリカの魅力は服で伝えます。当日はジャズやロック、ブレイクダンスなど個性豊かな3組のダンサーたちが会場をわかせました。音楽も、基本的には流行を意識したものを取り入れました。

モデルは、ミスコンや雑誌等で活躍する若い日本人女性。ターゲットである若い女性に、いかに親しみを感じてもらうかを重視しました。

民族衣装ではない

衣装をつくるのは個展を出したり、受賞経験もある若手デザイナーたち。まごことではない。デザインとしてしっかり通用する、観る者を唸らせる若手デザイナーたちの新作コレクションの場としてのTokyo Africa Collectionもありました。企画を進めるうえで何度も誤解されましたが、Tokyo Africa Collectionは民族衣装のショーではないのです。衣装は、アフリカ各国の意外性や魅力的な側面から得たアイデアをもとに、デザイナーたちがイメージを膨らませてデザインに陥れていくという過程を経ています。とにかく爆発する彼らの個性と、芸術性にはとても刺激をもらいました。他方、アフリカという根本から逸れないように、アフリカの現地の人からみて首を傾げられるようなものにならないように、現地滞在経験のある運営スタッフがマネージャーとして、デザイナーたちをフォローしました。後日談ですが、アフリカ各地の友人たちにショーのことを話し、写真や映像を見せると本当に喜んでくれる人が多かったです。デザイナーたちのこだわりと、アフリカを愛するマネージャー、そして私は演出監督としてターゲットである若い女性に届くかという点を大事にして、それらが折り重なる形でデザインと演出の流れを詰めてゆきました。

スタバにいくようなオシャレさを目指して

スタバに行くようなイメージ。インスタグラムに写真をあげられそうなイメージ。広報統括として、ホームページから何から徹底的に「ありがちなアフリカイベント」から逃れるためのイメージ戦略を重視しました。ダサくない、とにかく洗練されたスタイリッシュなイメージ。ともしれば、イマドキの女子大生からも、アフリカ好きにすらそっぽを向けられるリスクもありました。アフリカを全面に押し出して、アフリカ好きにターゲットを絞った方が集客が期待できるのではないか。そんな声が運営スタッフからでたこともありました。しかしそれではこのイベントの意味がありません。絶対に届くと信じて、広報部で一丸となって取り組みました。

死に物狂いの努力が報われた瞬間

当日準備においてもおこる度重なるトラブルに肝を冷やし、リハーサルは開場時間ギリギリまで続けました。共同代表の根津さんを含め、舞台裏で欠かせない仕事をこなしてくれている運営スタッフの中には本番を観ることができなかった人も多かったです。私は演出監督として、当日細かい指示を出しつつ、特等席でショーを見守ることができました。ショー本番とお客様の反応を間近でみて、ショーの成功を確信しました。幅広い年齢層のお客様の中には、若い女性が多く、私がよく知る「意識の高い人が集まるイベント」「アフリカ好きが内輪で盛り上がるイベント」とは似ても似つかない光景でした。ショーが終わった後は、「想像以上だった」「とても良かった」そんな会話があちこちから聞こえてきました。徹夜続きで体力の限界でしたが、そんな疲れが吹き飛ばすほど嬉しかったです。「一生忘れないほど感動した」そうおっしゃってくださる若い女性もいらっしやいました。工夫に工夫を凝らし、届けたい思いを届けたい方々に会場に足を運んで頂くことができた。そして心に残る形で届けられた。死に物狂いの努力が、報われた瞬間でした。

Tokyo Africa Collection 2016はTICAD VI(第6回アフリカ開発会議)にあわせて開催されました。ショーの帰り、または翌日にお客様はTICADに関連したニュースを観たことでしょうか。それまではそんなニュースに見向きもしなかったような方々が、「おっ」と興味をもってくださったなら、この上なく嬉しいです。南スーダンの報道に代表されるように、アフリカに対する報道は依然ネガティブなものが多いです。それでも、意外に魅力的な一面もある、こんなに自分たちと近い側面もある、自分たちよりも進んでいる側面もあるんだ、ということを示ショーに足を運んでくださった方々に覚えておいて頂けたら幸いです。

たくさんの方々の支えを胸に

Tokyo Africa Collection 2016ほど人に恵まれた企画はありません。人づてに集まった個性豊かな運営スタッフ、デザイナー、モデル、技術・美術スタッフの顔ぶれを思い浮かべると、「この人がいなかったら、成功はなかった」と思える人だらけです。司会やダンサー、コメンテーターの方々、取材をくださったメディア関係者の方々、また、無謀にも思える取り組みにチャンスを与えてくれたクラウドファンディングや協賛を通じて資金面のサポートをくださった方々・企業様、後援に協力してくださった団体様には、感謝してもきれません。お名前をお一人お一人挙げることはできませんが、その他にもアドバイスを仲介・紹介、広報、リサーチ等に親身になって協力してくださった方々にも心より御礼申し上げます。

絶対にできっこない、と協力を断られることも多々ありました。鼻で笑われることもありました。それでも、絶対成功すると信じてついてくれた運営スタッフ、デザイナー、モデル、技術スタッフの皆さまとサポートして頂いた皆さまに、ショーの成功をご報告できますこと大変光栄に思います。本当にありがとうございました。

デザイン Designer 中南佑理 Yuri Nakaminami (ルワンダ)	モデル Model ルワンダ 榎本サラ Sara Enomoto	横山瑞季 Mizuki Yokoyama	司会 MC 藤野澤花
沼尻美夢 Miyu Numajiri (エジプト)	エジプト 佐々木椋子 Ryoko Sasaki	角元百花 Moka Kadomoto	
KENGO SHIMIZ (ガーナ、タンザニア)	ガーナ 三木つばさ Tsubasa Miki	岸亜由香 Ayuka Kishi	ダンス Dancer Be-yan
鷲見友佑 Yusuke Washimi (モロッコ)	モロッコ 佐々木桃美 Monami Sasaki	岡本奈津実 Natsumi Okamoto	Shuji
頓所葵 Aoi Tonsho (南スーダン)	タンザニア 石黒滯 Mio Ishiguro	舛田桃香 Momoka Masuda	uzuna & しびしび
伊藤誠一朗 Seichiro Ito (ケニア、南アフリカ)	南スーダン 篠原梨菜 Rina Shinohara	鈴木ちひろ Chihiro Suzuki	
中川真琴 Makoto Nakagawa (エチオピア)	ソマリア 高折沙羅 Sara Takaori	三友杏奈 Anna Mitomo	
稲葉ゆめ Yume Inaba (ソマリア)	ケニア 大栗美南 Minami Oguri	関口沙織 Saori Sekiguchi	ゲストコメンテーター Guest Commentator 佐藤慧 Kei Sato
	エチオピア 宮島利沙 Risa Miyajima	福永胡桃 Kurumi Fukunaga	
	南アフリカ 濱野風花 Fuka Hamano	高山恵利佳 Erika Takayama	渡部雪絵 Yukie Watabe

共同代表 Co-Presidents

菅生零王 Leo Sugo

根津朋子 Tomoko Nezu

演出監督 Director

菅生零王 Leo Sugo

渉外統括 Fundraising Chief

根津朋子 Tomoko Nezu

渉外 Fundraising Officers

五十嵐健太 Kenta Igarashi

石川緋嘉子 Hikako Ishikawa

津坂美真 Miki Tsusaka

町田日奈子 Hinako Machida

広報統括 Public Relations Chief

菅生零王 Leo Sugo

広報 Public Relations Officers

落合亮太 Ryota Ochiai

三瓶聖奈 Seina Sanpei

野口英里子 Eriko Noguchi

会場統括 Venue Manager

町田日奈子 Hinako Machida

ウォーキング統括 Walking Director

伊藤知会 Chie Ito

モデル統括 Model Manager

菅生零王 Leo Sugo

来場者統括 Ticketing&Ushering Manager

五十嵐健太 Kenta Igarashi

会計 Treasurer

竹内崇裕 Takahiro Takeuchi

協賛企業

株式会社ビズリーチ

株式会社リクルートキャリア

株式会社 DHC

販売

RICCI EVERYDAY

Alizeti

くるみ

グローバルフェスタ責任者 Global Festa Manager

福岡理緒菜 Riona Fukuoka

ルワンダマネージャー Rwanda Managers

根津朋子 Tomoko Nezu

町田日奈子 Hinako Machida

エジプトマネージャー Egypt Manager

町田日奈子 Hinako Machida

ガーナマネージャー Ghana Manager

瀧澤瑞季 Mizuki Takizawa

モロッコマネージャー Morocco Manager

松岡さくら Sakura Matsuoka

タンザニアマネージャー Tanzania Manager

稲川雅也 Masaya Inagawa

南スーダンマネージャー South Sudan Manager

菅生零王 Leo Sugo

ケニアマネージャー Kenya Manager

根津朋子 Tomoko Nezu

エチオピアマネージャー Ethiopia Manager

伊藤知会 Chie Ito

南アフリカマネージャー South Africa Manager

三瓶聖奈 Seina Sanpei

ソマリアマネージャー Somalia Manager

島野珠緒 Mio Shimano

田中葵 Aoi Tanaka

後援

一般社団法人アフリカ開発協会

一般社団法人アフリカ協会

駐日南アフリカ共和国大使館

駐日エチオピア連邦民主共和国大使館

市民ネットワーク for TICAD

認定

TICAD VI (第6回アフリカ開発会議) サイドイベント

グラフィックデザイナー Graphic Designer

小松原雄太 Yuta Komatsubara

ウェブデザイナー Web Designer

菅生零王 Leo Sugo

照明 Lighting

徳本慶 Kei Tokumoto

DJ

畠山たくや Takuya Hatakeyama

音響 PA

加藤銀弥 Ginya Kato

メイク Makeup Artists

船木明日香 Asuka Funaki

宮田みさき Misaki Miyata

映像制作 Video Production

菅生零王 Leo Sugo

写真撮影 Photographers (Photo)

菅生零王 Leo Sugo

常井裕輝 Yuki Tokoi

藤岡柁平 Shuhei Fujioka

堀田なつみ Natsumi Hotta

吉原ボビー Bobby Yoshihara

映像撮影 Photographers (Video)

橋本悠平 Yuhei Hashimoto

久田ちあき Chiaki Hisada

運営補佐 Management Assistants

青木璃紗 Risa Aoki

上田ちひろ Chihiro Ueda

大金史典 Fuminori Ogane

大重奈々 Nana Oshige

大原かれん Karen Ohara

萩尾公貴 Kouki Hagio

島崎駿 Shun Shimazaki

竹崎文崇 Fumitaka Takezaki

中澤舜 Shun Nakazawa

那口誠 Makoto Naguchi

沼川直樹 Naoki Numakawa

松浦拓摩 Takuma Matsuura

松永圭以 Kei Matsunaga

八木夏希 Natsuki Yagi

渡辺光 Hikari Watanabe

Tokyo Africa Collection 2016 ブックレット

発行日 2017年2月 (第二版)

発行元 Tokyo Africa Collection 運営事務局

編集長：菅生 零王 編集補佐：五十嵐 健太

デザイン：小松原 雄太

和田 一輝 卯都木 琢磨

主催 Tokyo Africa Collection 運営事務局

2016年8月28日(日)

文化ファッションインキュベーション ホール

(東京都渋谷区桜丘町23番21号 渋谷区文化総合センター大和田11階)

RICCI EVERYDAY

アフリカの持つ魅力で、“人々のライフスタイルをより豊かなものに”をコンセプトに、ウガンダの直営工房でものづくりを行う。アフリカン・ファブリックを使用した色鮮やかなハンドメイド・アイテム。バッグからトラベルグッズまで、デザイン性と機能性を兼ね備えた製品が揃う。



Alizeti

ルワンダ発ファッションブランド。

Alizetiとはスワヒリ語で「ひまわり」という意味。関わる人全てがひまわりのように輝いてほしいという願いが込められている。

他の誰とも被らない

“あなただけの一着”を。



一般社団法人アフリカ開発協会

一般社団法人アフリカ協会

駐日南アフリカ共和国大使館

駐日エチオピア連邦民主共和国大使館

市民ネットワーク for TICAD

認定 TICAD VI (第6回アフリカ開発会議) サイドイベント

<掲載メディア>

三田キャムパス、an an、朝日新聞、co-media、Africa Quest.com、開発メディア ganas、READY TO FASHION、ROBE、毎日新聞、アフリカビジネス振興サポートネットワーク、Fashion 360 Magazine、MERY

*掲載日の新しい順





TOKYO
AFRICA
COLLECTION
Tokyo Africa Collection
TOKYO
AFRICA
COLLECTION

